

全体の発表・討論

第 1 話者の鈴木氏の発表では、パレスチナの「他者」を信賴と猜疑の両側面から検討した発表を拝聴した。遠く、時には対立的な印象を与える「他者」という概念を反転させ、それをパレスチナの文脈に置くことにより、良い「他者」（イギリス委任統治の役人）の存在を回顧録等から知ることができ、翻ってそれは、悪い「身内」（委任統治やイスラエル側への第五列）を考えるきっかけとなった。同発表からは、既存概念の複雑性や多面性を知ることができ、自身の研究においても語法を慎重に使うべきだと思わせる深い示唆があった。

第 2 話者の昔農氏の発表では、ドイツにおけるムスリムとユダヤ人およびその関連組織間での競合・協調関係について拝聴した。この発表を受けて、「ロシア系ユダヤ人」のなかでもタタール人、中東・アフリカ出身のユダヤ人の集団、トルコ人（ガストアルバイター）のなかでもクルド系などはドイツ社会でどのように受容されており、それらの集団間での競合・協調関係を含めるとさらに複雑な様相を呈しているのかどうか、気になった。

第 3 話者の熊倉氏の発表では、新疆ウイグル自治区の民族幹部を軸として、中央と同地域の関係について拝聴した。現代中国政治における民族幹部の位置付けが理解できた一方で、時代によって変遷した同幹部の数は、中国の権威主義体制の安定や不安定にいかなる影響を与えたのか疑問が湧いた。また、民族幹部を育て体制側に取り込む行為は、他の民族においても行われていることなのか、そうだとすれば数多の民族幹部間の関係性についても興味をもった。

第 4 話者の黒木氏の発表では、WWI 期のシリア・レバノン人の世界的な拡散と、それぞれの地域での信賴ネットワークの醸成が、ファドロ・ホーラーニー氏の移民史を中心に報告され、自身のレバノン政治研究にとって大いに参考となる点が多数あった。レバノンでは 2018 年からディアスポラによる在外投票が制度化され、微妙な人口動態とそれに基づく政治体制に変化が起こりうるものとして今後も注目されており、在外レバノン人の存在が宗派主義をより強固にするのか、世俗勢力として一石を投じるのか、自身の研究においても検討を重ねていきたい。

ポスター発表

「レバノン内戦における宗派内と宗派間の暴力の展開」と題してポスター発表の貴重な機会をいただき、参加者から多くの建設的・批判的なコメントをいただくことで、自身のレバノン地域研究や政治学の先行研究に偏りがちであった視点を広げることができた。

企画展

企画展ではシビルダイアログキャラバンの試みとして、保育施設における研究成果の還元やアウトリーチ活動を学ぶことができ、研究が研究者やその関係者に閉じたものではなく、広く社会に貢献するものであることを学んだ。これまでは研究成果の還元というと、大人を対象としたものというイメージが先行していたが、本企画展を参考にして、研究成果を広く認知してもらうための工夫を再考するきっかけとなった。

最後に、本集会に参加させていただいたことを、心より感謝申し上げます。